

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（解答は句読点も字数に数える）

修業式の五日ほど前に、祖母が息をひきとった。持病はなかったから、つまり老衰死である。その死顔も、また死そのものとの接触感も、ともに少年の意識にのぼらなかった。父がおいおい手ばなしで、まるで子供のように泣きながら家の中をうろうろしているのを、①少年は何か不思議な観物を見るように眺めた。お別れに、割箸の先へつけたガーゼで祖母の口を拭かされた時にも、土色に窄まって開いている老女のしなびきった唇は、みにくいと感じただけに過ぎない。もう一つ、そんな醜いものを半公開の儀式にまで仕立てる大人たちの愚かさに、へんな軽蔑の情をおぼえただけにすぎない。少年はむしろ祖母に同情した。彼女の死への同情ではなかったけれど。

そんな少年にとって、もし何か死の実感に似たものがあつたとすれば、それは祖母の死ぬ日の朝から（臨終は夕方だった）、近所の大きな黒犬が庭へまぎれこんで来て、前脚を縁側にかけてながら、しきりに遠吠えをしたことである。いくら追はれても水をぶっかけられても、犬は出て行かなかった。ますます牙を剥きだして吠えさかった。少年は、いよいよ祖母が息を引きとったあとで、あの犬が見ていた何か人間の目には見えぬものが、つまり死なのだと思った。

葬列も葬式も、あらゆる大人たちのする儀礼の例にもれず、長たらく退屈な、無意味な行事の連続にすぎなかった。少年は南国の春の砂ぼこりの中に、小さな紋附羽織を着せられて、みじめな曝し物にされている自分だけを意識していた。腹だたく、口惜しかった。

少年は、あの吠えさかる犬が目に見ていたものが死なのだと、漠然と感じてはいたけれど、これには勿論、想像のへだてとでも言うべき一皮かぶった気持があつた。少年が祖母の死を、はつきり現実として受けとつたのは、いよいよ修業式が済んで、小さな免状と大きな優等証書の二枚を筒巻きにして、ぼんやり家に帰って来たあとである。父は役所だった。家には母だけがいて、その筒巻きを手にすると、ちよつと拡げてみて、「そう」と、にこりともせず、呟くように言つた。そして、また巻いて、父の机の上に置いた。

少年は勿論、ほめられようと思つて帰つて来たわけではない。第一少年自身にしてからが、その日のことをさっぱり嬉しいとも誇らしいとも思つてはいない。勝気で、無口で、そのくせ胸の奥に何か少年には窺い知ることのできない情愛や智慧を、じつと包みこんでいるような母の性格も、少年には分りすぎるぐらい分っている。そういう母を、少年はたしかに心のどこかで愛しているのだが、その一方やはりその母に、一種の嫌悪と反発を、たえず感じずにはいらなかった。自分自身の影に、無限に愛情を感じる人もあれば、無限の嫌悪をいだく人もある。その中間の人は極めて珍しい。少年は明らかに後者の型だった。少年は母のなかに、③自分の影を嗅ぎつけていたのである。……そんな母から少年は「そう」という呟きのあとに「よかつたね」という言葉が添わることを、最初から予期していたわけではない。しかしその日だけは、何か無性に、それに類する慰めの一言が欲しかった。少年は疲れていたのかも知れない。死や葬式や修業式が、たてつづけに続いたのである。少年は甘えたかった。ほんの少し。ただ、ほんの少し。……

少年は自分の勉強机の前へ行つて、ゆっくり袴の紐をときながら、ふと祖母のいない空虚さを、焼けつくように頭の隅に感じた。祖母ならば、「よかつたのう」と言ってくれるばかりか、痩せ細ったカサカサの手で、頭を撫でたり、何かその辺をごそいわせて、褒美を出してくれ、撫でられたり、褒美をもらつて嬉しそうな顔をつくろうのは、少年にとつて迷惑なことだったが、それをしてくれる人は、五日ほど前から、突然いなくなったのだ。あの隠居部屋には、たしかに誰もいないのだ。……この不在の感覚が、痛いほど少年をしめつけた。

そうした少年の心の動きは、祖母への追慕などというものとは、およそ縁のない、裏はらなものに違いなかった。そこには一種の罪障感と自責の念が、黒々とよどんでいた。祖母は、……あんなにも自分が甘えぬき同時にまた避けぬいた祖母は、自分から何の感謝のしるしも受けとらずに、黙つて死んで行つたのだ。この取り返しをつかないものが、つまり「死」というものなのだ。

少年は、この空虚感と、自分への怒りとに、どうにも堪えられなくなつて、縁側に寝そべつたまま、ふと口に出してみた。

「④お母さん……お祖母さんは？」

「え？」

座敷の暗いところで、何か片づけ物をしていた母は、怪訝そうに少年を見た。そして、哀れむようにじつと見つめた眼を、またよそへそらした。

少年はその瞬間、しまった、と思つた。ちらりと目にうつつた母の眼のうるみのなかに、少年は明らかに誤解の影をとらえたのである。「うん、そうじゃないの……」と、少年は打ち消そうとして、言葉にまつた。

「何が？」

母は小声で聞き返して、また哀れむように少年を見た。

（神西清『少年』より 表記を現代仮名遣いに変更しています。）

問一 ①「少年は何か不思議な観物を見るように眺めた。」とありますが、このときの少年を説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父の悲しみに深く共感し父のことを気の毒に思っている。
イ 祖母の死に衝撃を受け、事実を受け入れられないでいる。
ウ 父の狼狽を、大人のふるまいとして情けなく感じている。
エ 父の泣く姿を、現実感のないものとして外から見ている。

答…エ

問二 ②「あの犬が見ていた何か人間の目には見えぬものが、つまり死なのだと思つた。」について説明した次の文の空欄Ａ・Ｂに入る言葉を、文章中から四字ずつで書き抜きなさい。

＊少年は葬式を儀式的なものと感じ **A** を抱いていたが、犬の荒々しい様子を見て、そこに **B** を感じ取っている。

答…Ａ 軽蔑の情 Ｂ 死の実感

問三 ③「自分の影」とあるが、少年は何に対して「自分の影」を感じているか。文章中から六十字以内で探し、初めと終わりの五字ずつを書きなさい。

答…勝気で、無口 ゝ 母の性格

問四 ④「お母さん……お祖母さんは？」という少年の言葉について、二人の生徒が次のような会話をしました。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ア…少年は祖母が死んだことをちゃんとわかっているよね。どうしてそんなことを言つたんだろう。

Ｂ…少年が祖母がいらない現実を感じた瞬間に、つい口をついて出たんじゃないかな。母に「そう」としか言われなかったあと、急に祖母のいない空虚さを感じて、もし祖母がいたら **A** だろうと思つたんだろうね。

ア…つまり、母の態度に寂しさを感じて、祖母のあたたかさを思い出したってこと？

Ｂ…そう。だからあの言葉は、祖母を呼ぶというより、 **B** 気持ち言葉になつたんだと思う。

(1) 空欄Ａには、少年が祖母の行動を想像する言葉が入る。その言葉を、二十五字以上三十五字以内で書きなさい。

(2) 空欄Ｂに入る、少年の気持ちを表す言葉を、五字以内で書きなさい。

答…(1) **例**「よかつたのう」と言ってくれ、撫でたり褒美を出してくれたりする（31 W） (2) **例**甘えたい